

# 下ノ西遺跡 II

1999

新潟県和島村教育委員会

# 下ノ西遺跡 II

1 9 9 9

新潟県和島村教育委員会

表紙

封緘木簡出土状況（II区SD201）

## 序

和島村では、「沼垂城」と書かれた木簡が出土した国指定史跡八幡林官衙遺跡をはじめ、縄文時代の組み合わせ式石斧柄が発見された大武遺跡、平安時代中期の開発領主の居宅とみられる門新遺跡など、重要な遺跡の発見が相次いでおります。

大字小島谷に所在する下ノ西遺跡は、そのような全国的に注目される遺跡のひとつで、平成8年度から調査が継続されています。これまでの調査では、全長20mを超える巨大な掘立柱建物や、大規模な饗宴の開催を物語る土器廃棄土坑、刑罰の情景を描写した絵画板、役人の二重帳簿木簡の出土で話題を呼び、八幡林官衙遺跡とともに古代古志郡の支配に関わる重要な遺跡であることが明らかになりました。

本年度の調査は、I区建物群の西限および完数値による地割りの有無、II区木簡出土溝の延長確認を目的として、文化庁の補助金をいただき7月から実施したものです。その結果、I区建物群の西限が明らかとなり、建物の分布する西のはずれでは、大型の南北棟・東西棟・井戸が9尺の完数尺で造営された、官衙特有の規格を示すエリアが確認されました。生々しく残る井戸の木枠や、水の神への生贊として中に投入された馬の骨、地面に林立する掘立柱建物の柱根などは、当時の榮華を現在に伝えております。II区では昨年ほどの発見はありませんでしたが、「・・西三村田人・・」と書かれた木簡とともに、木簡の修正や再加工時に排出された削り屑がたくさんみつかり、「刀筆の吏」とも表現される役人の勤務状況を如実に示すものとして注目されます。

本遺跡の示す内容は、古代における地方支配を知る上で極めて重要な情報であり、これらの成果を報告する本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願っております。

なお、この発掘調査にあたって、文化庁・国立歴史民俗博物館・新潟県教育委員会からは、適切な御指導をいただき、また実際の作業につきましては、地元和島村の有志の方々に、長期間にわたっての御協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

和島村教育委員会

教育長 下村孝一

## 例　　言

- 1 本書は、新潟県三島郡和島村大字小島谷字下ノ西に所在する「下ノ西遺跡」の確認調査報告書である。
- 2 本事業は、文化庁の補助金を得て、和島村教育委員会が主体となって実施した。
- 3 遺物の注記は「98下西」とし、ほかに調査地区・出土遺構名・層序等を記した。
- 4 遺物は和島村教育委員会が一括保管している。
- 5 遺構の名称については、通し番号とせず、遺構の種類別に番号を付した。
- 6 遺構実測図は業者委託とし、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。
- 7 整理作業は、調査担当・調査員を中心下記のメンバーの協力を得た。  
小田富美子・久住幸江・近藤保・関川たづ子・高橋智子・早川雅子・山口八千代（五十音順）
- 8 木簡については、国立歴史民俗博物館教授の平川南氏にお願いし、同館の赤外線テレビカメラにより解読作業を進めていただいた。
- 9 SE202から出土した獸骨については、小林園子氏（国立歴史民俗博物館西本研究室）樋泉岳二氏（早稲田大学）に同定していただいた。
- 10 本書の編集・執筆は調査員・遺物整理員の協力を得て、調査担当者が行った。
- 11 調査体制は、次のとおりである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
調査指導	新潟大学人文学部	小林昌二	（教授）
	国立歴史民俗博物館	平川 南	（教授）
調査担当	和島村教育委員会	田中 靖	（主任）
調査員	〃	丸山一昭	（主事）
事務局	〃	藤井賢計	（事務局長）

- 12 発掘調査については、村内の有志の協力を得て実施した。また、発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々にご教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

相沢 央・浅井勝利・牛川喜幸・春日真実・鍾江宏之・金子拓男・北村 亮・鬱田克史・  
坂井秀弥・関 雅之・高橋 保・田中一穂・寺崎裕助・寺村光晴・田海義正・戸根与八郎・  
西本豊弘・藤巻正信・藤森健太郎・前田雪恵・松村恵司・山本 肇（五十音順）

# 目 次

序

例言

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
1 現在までの経緯.....	1
2 平成10年度調査の経過.....	1
第Ⅱ章 発掘調査の概要.....	4
1 基本層序.....	4
2 検出された遺構.....	5
(I区) .....	5
(II区) .....	8
3 検出された遺物.....	8
(I区) .....	8
(II区) .....	11
第Ⅲ章 ま と め.....	15
1 建物配置の計画性.....	15
2 建物群の性格.....	16
第Ⅳ章 調査成果要約.....	17
引用・参考文献.....	18
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第1図 平成10年度作業風景（I区）.....	2
第2図 周辺の遺跡分布図.....	3
第3図 調査区土層柱状図.....	4
第4図 II区SD201・202主要木製品出土位置 .....	12
第5図 I a～II期遺構配置模式図 .....	15

## 表 目 次

表1 SE202出土動物骨一覧	10
表2 木簡訳文一覧	14
表3 建物群の変遷	16

## 図 版 目 次

(図面図版)

図面1 I区遺構平面図	20
図面2 II区遺構平面図	21
図面3 I区SE202・203平・断面図	22
図面4 I区出土遺物（掘立柱建物・SE203等）	23
図面5 I区出土遺物（SE202）	24
図面6 II区出土木製品（1）	25
図面7 II区出土木製品（2）	26

(写真図版)

図版1 I区空中写真（1）	27
図版2 I区空中写真（2）	28
図版3 I区SB24AB（東から）・同柱穴土層断面（P-300）・同（P-301）	29
図版4 I区SB25（南から）・SB26（南から）・SB19（南から）	30
図版5 I区SE202（南西から）・SE203（北から）	31
図版6 II区空中写真・SB23礎板A（北から）・同礎板B（北から）	32
図版7 II区SD202馬形出土状況・SD201草履出土状況・同13号木簡・同12号木簡	33
図版8 I～II区出土木簡・墨書き器	34
図版9 II区出土木製品（1）	35
図版10 II区出土木製品（2）	36
図版11 I区SE202出土馬骨	37

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

## 1. 現在までの経緯

下ノ西遺跡は、島崎川低地の中の微高地上に立地し、島崎川と小島谷川・梅田川・保内川の合流点を前面に控え、詳細なルートは特定されていないが、古代の幹線道路である北陸道が付近を通過するなど、水・陸上交通の要衝の地に立地する古代遺跡である。

近年、本遺跡の中央を縦貫するJR越後線に添って、村道小島谷・辺張線建設が計画されたために、和島村教育委員会では平成8年度から事前の発掘調査を実施することになった。同年の調査では、桁行7間級の巨大な掘立柱建物や、1,000個体を超す土師器椀の廃棄土坑、幅5~5.5mを測る道路跡など、奈良~平安時代にかけての重要な遺構が発見された。これらの様相は、一般集落のそれとは大きく異なり、何らかの公的施設あるいは郡司級の居宅である可能性が強まった。

この調査成果を受け、平成9年度に遺跡の具体的な性格を知るための確認調査を実施した。その結果、8年度調査区の隣接地点（I区西）からは11棟を超す掘立柱建物が検出されたほか、遺跡内部で規則的な地割が存在したことを窺わせる溝が検出された。また、遺跡の西端にあたるII区からは、奈良時代前半の区画溝を伴う掘立柱建物と木簡など多量の遺物が出土した。木簡には刑罰の情景を描写した可能性がある絵画板や、二重帳簿ともとれる出撃・国司借貸についての記録簡、「越後國高志郡・・・」と書かれた貢進物付け札などがみられ、本遺跡が古代古志郡衙に関連することが確実となった。しかし、予算の関係からI区建物群の西限の確認および地割に関する施設のさらなる発見、II区の区画溝を伴う掘立柱建物の全容については、平成10年度調査に持ち越された。

## 2. 平成10年度調査の経過

本年度の調査は平成10年8月3日に着手し、バックホーによる表土剥ぎを実施した後、人力により包含層掘削・遺構確認作業を行った。同作業は、当初8月下旬まで完了する予定であったが、例年にない夏期の天候不順のため大幅に遅れ、9月初旬までずれこんだ。

遺構確認の結果、I区では平安時代の掘立柱建物5棟のほか、奈良~平安時代の土坑・溝などが検出され、その分布状況から建物群の西限がほぼ明らかになった。また、建物が分布する西端部では、大型で庇を持つ南北棟と東西棟がみつかり、昨年度調査した南北棟・井戸とともに、遺構間の距離・建物の柱間が9尺（約2.7m）の完数尺で造営された、官衙特有の配置を示す部分が発見された。

9月に入ると、昨年度時間切れで調査未了のまま埋め戻した井戸2基について、既調査区の埋め土を取り除き再調査を行った。そのうち1基からは、県内では2例目となる馬骨が出土し（9

月9日)、水神に捧げる生贋の実例として注目を集めた。

9月21日からは、前述した井戸の再調査と並行してII区の遺構確認に入る。その結果、多量の木簡が出土した区画溝(SD201)の延長は、昨年度調査した西端から約4.2mが残存していたのみで、内側の掘立柱建物も柱穴2基分の礎板が地面に露出した状態で検出されるなど、過去の土地造成により大きく削平されている事実が明らかになった。

9月21~28日、SD201の調査を実施する。溝中からは、鎌の柄・草履などの木製品や、「...西三村田人」と書かれた文書木簡?の断片・木簡の削り屑が出土した。

10月5日、新潟大学人文学部教授の小林昌二氏から、検出遺構・出土木簡についての現地指導をいただく。

11月7日、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館に資料を持参し、平川南教授に木簡の釦文作成と写真撮影を、小林園子氏に獸骨の鑑定を依頼し、11月初旬の記者発表・現地説明会に合わせて作業を進めることで了解をいただいた。

11月6日、報道関係各社に対し調査成果の記者発表を行い、同8日には一般向けの現地説明会を開催した。同日は、県内を中心とする約350名の見学者が遺跡を訪れた。

10月28日、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施し、以後は遺構の再確認・基本層序に使用する柱状図の作成など、補足作業を行った。

11月13~30日、遺構の砂入れおよび調査区の埋め戻し。

12月4日、同日のシート洗浄・機材収納をもって平成10年度の現場作業を終了する。



第1図 平成10年度作業風景(1区)



第2図 周辺の遺跡分布図

## 第II章 発掘調査の概要

### 1. 基本層序

第3図は、平成10年度調査区の基本層序を土層柱状図で表したものである。I・II区ともに、昨年度調査区の層序と基本的には同一である。

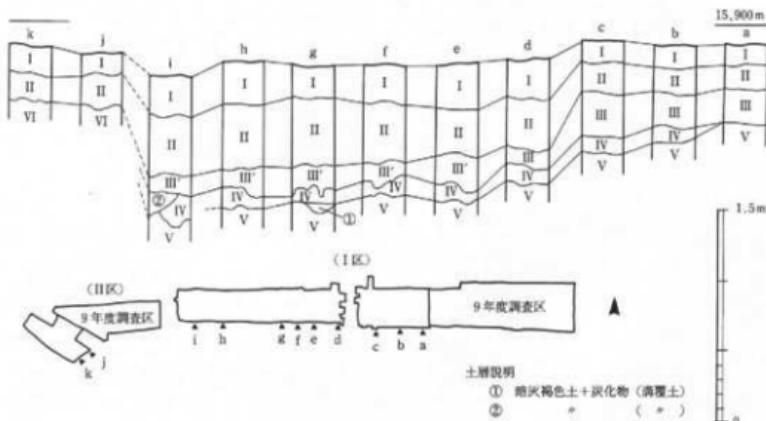
(I区)

- I 層 水田耕作土
- II 層 暗灰色土で粘性が強い。近世陶磁器が微量出土する。
- III 層 暗灰褐色土で炭化物粒を多く含み、奈良～平安時代の遺物を包含する。本層は、d～eの中間付近で黒味を増し、黒褐色を呈するようになる(III'層)。
- IV 層 灰褐色土で粘性が強い。本層はa以西で出現し、奈良時代の遺物を包含する。
- V 層 青灰色土であります。昨年度調査部分では、本層は酸化状態にあり黄褐色を呈していた(基盤層)。

(II区)

- I 層 水田耕作土
- II 層 暗灰褐色砂質土。近世陶磁器が微量出土する。
- VI 層 暗茶褐色土で泥炭質、未分解の植物を多く含む(基盤層)。

\* 本年度の調査区では、昨年度の調査で確認されたIII～IV層の遺物包含層は存在せず、近世以降の地形変化の際に削平された可能性が高い。



第3図 調査区土層柱状図

## 2. 検出された遺構

下ノ西遺跡は、中心となる時期・遺構密度の違いより、大きくI区・II区にブロック分けが可能である。両ブロックは、機能した時期に明らかな差があり、I区が9世紀台を中心に多数の掘立柱建物が造営されるのに対して、II区は8世紀前半のみ機能したエリアとみられる。

### (I 区)

#### a. 掘立柱建物

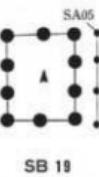
今回の調査では、新たに5棟が検出された。このうち注目されるのは、昨年度調査で確認されたSB19と主軸方向が一致する、SB24AB・25の3棟と、同じくSB21と一致する、SB26の1棟である。

以下では、昨年度調査分のSB19・21を含めた6棟について報告する。

**SB19** 梁間2間(4.7m)×桁行3間(6.3m)の南北棟である。建物の主軸

方向はN-1°-Eを向く。柱の掘り方は、長軸方向で80~100cmを測る南北形を呈するものが多いが、方形に近い部分もある。柱痕跡は比較的明瞭で、直径30cm近い丸柱と推定される。SB19の東面には、目隠し塀の可能性が高いSA05

が設置されている。

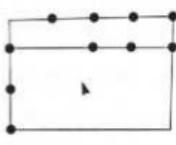


SB 19

本建物は、9世紀前半の遺構(SX314)を切って構築されており、9世紀中葉以降に位置づけられよう。

**SB21** 梁間2間(6.0m)×桁行4間(11.2m)の身舎を持ち、北面

に1間(2.3m)の庇が付く東西棟建物である。建物の主軸は、N-20°-Eを向く。柱掘り方は、直径30~40cmを測る円形を呈するものが多い。柱痕跡は、身舎・庇の柱穴の2ヶ所で確認されており、それぞれ直径25cm・20cmを測る円形であり、掘り方の大きさと、柱の直径にあまり差がないことが明らかになった。

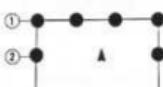


SB 21

本建物の西側に隣接して所在するSE202は、井戸枠の方向が一致することから、本建物に伴うものとみられる。井戸廃絶時に入れられた土器の型式から、建物の時期は10世紀前葉頃を下限とする可能性が高い。

**SB24** 梁間2間(5.4m)?×桁行3間(8.1m)の南北棟で、柱間

は梁間・桁行ともに9尺(2.7m)の等間である。本建物は、ほぼ同じ位置で建て替えが行われている。創建時(SB24A)の柱掘り方が、一辺100~120cmの方形であるのに対して、建て替えられた後(SB24B)のそれは、直径100cm前後の円形に変化している。建物の主軸方向はN-1°-Eを向く。SB24Bの柱穴のうち図中の①・②において、それぞれ礎板・柱根部の遺存が確認されている。後者は、直径約30cmを測る丸柱であった。

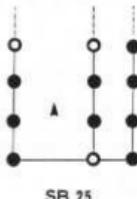


SB 24 AB

本建物の所属時期は、建て替え後の柱穴内部から9世紀中葉頃の須恵器が出土していることや、構築位置・木枠の方向から共存した可能性が高いSE201・203出土土器からみて、創建時のSB24Aは9世紀前半頃、建て替え後のSB24Bは9世紀中葉～後半頃に位置づけられよう。

**SB25** 梁間2間(5.4m)×桁行3間(8.1m)以上の身舎で、東面に庇

が付く南北棟である。建物の主軸方向は、N-1°-Eを向く。柱間は庇を含め、いずれも9尺(2.7m)の等間である。柱掘り方は、長径70~100cmを測る不整円形であり、身舎と庇部分で平面形・大きさに違いはない。柱穴のうち、庇部分の2ヶ所に柱が遺存しており、その直径は20cmを僅かに超える程度であった。



SB 25

SB25は、JR越後線のために全容を明らかにできなかったが、その構造・柱間の大きさから桁行5間程度となる可能性がある。桁行5間(13.5m)と仮定した場合、庇を含めた平面積は約110m<sup>2</sup>に達する。

本建物の時期は、他遺構との切り合い関係・柱穴内出土遺物からみて、9世紀前半～中葉頃と推定される。

**SB26** 梁間1間以上×桁行3間以上の、庇付きあるいは総柱の構造を持つ東西棟である。

本建物の主軸方向は、N-20°-Eを向く。柱間は、梁間が南より2.1m(庇)・2.4m、桁行が東より2.1m・2.4m・2.0mを測る。柱穴は円形で、南西隅が直径80cmと大きい以外は、直径30cm程度である。柱穴内部からは、ロクロ土師器の腕が少量出土している。



SB 26

b. 井戸(図面3)

SE202～203は平成9年度に存在が確認されていたが、時間不足のため調査を完了できなかったものである。本年度は、井戸の時期・構造を明らかにするために再調査を実施しており、以下では昨年度調査が終了しているSE201を含めて、概要を述べる。

**SE201** 直径(上場)2.1m・深さ1.5mを測る、円形の井戸である。本井戸は、深度約70cmの

位置に段を持つ、いわゆる二段掘り状を呈し、段より下位は平面形が隅丸方形に近くなる。他の2基が木枠を持つに対して、本井戸にはそれが確認できない。深度に比して著しく大きな中段以上を抜取り穴とみるならば、井戸廃絶時に木枠が抜かれている可能性も考えられる。

本井戸の時期は、上層出土土器の年代観からみて、9世紀中葉頃を下限にするものと思われ、前述したSB24Aなどと同時に機能していた可能性が高い。

**SE202** 一辺約1.5mの隅丸方形の掘り方を持ち、内部には一辺90cmを測る方形の井戸側が組

まれている。最大深度は確認面から-2.0mに達し、底面にはヘソ状のくぼみを持つ。構造的には方形縦板横桟型という分類に該当し、幅10~20cm・厚さ2.0cm前後・長さ(現存長)160

cm以上の縦板を、2段の横桟でとめている。

横桟は、四隅に打ち込まれた杭とホゾによってつながれている。各用材の樹種については、取り上げを行わなかったために詳細は不明だが、縦板は柾目の杉材、杭・横桟は広葉樹と推定される。

覆土については図面3に見られるように、-40cmまで炭化物粒を含む黒味の強い土が堆積し、以下は青灰色土ブロックを含む暗灰色土を基本としている。

SE201は、覆土の状況からみて人為的に埋められている可能性が高い。埋井にあたって何らかの祭祀が執り行われたものと推定され、最深部から出土した完形の土師器椀10点・同鉢1点・須恵器小型甕1点および、中層（-120～-130cmのレベル）で検出された馬骨は、その祭祀に関連するものであろう。

本井戸の時期は、廃絶時に入れられた土器の年代観から、10世紀前半頃を下限にするものとみられ、木枠の方向の一致などから前述したSB21・26に伴う可能性が高い。

SE203 一辺約1.6m不整円形の掘り方を持ち、内部には一辺90cmを測る方形の井戸側が組ま

れている。最大深度はSE202と比べるとやや浅く、確認面から-1.5mを測る。構造的にはやはり方形縦板横桟型という分類に該当し、幅12～22cm・厚さ3.5cm前後・長さ（現存長）110cm以上の縦板を、2段の横桟で留めたものと推定される。縦板は、上部に向けて若干の傾斜をもって開き、SE202がほぼ垂直であるのと対照的である。

横桟は、四隅に打ち込まれた杭とホゾによってつながれており、下位の1段のみが残存している。各用材の樹種については、取り上げを行わなかったため詳細は不明だが、縦板は杉の辺材（板目）を使用しており、外面には元になった木のアールをとどめている。杭・横桟は、いずれも広葉樹とみられる。

本井戸の土層堆積状況はSE202に近似し、図面3に見られるように-40cmまで炭化物を含む黒味の強い土が堆積している。以下は、青灰色土ブロックを含む暗灰色土を基調とし、やはり人為的に埋められている可能性が高い。

埋井の祭祀に関わる可能性が高い遺物としては、底面付近で出土した斎串1点および、中層（確認面から-68～-130cm）で検出された墨書きを持つ須恵器無台杯、黒色土師器椀、鉄製品の刀子がある。

本井戸の時期は、廃絶時に入れられた土器の年代観から9世紀後半を下限とし、SE202→SE203の順序で作り替えられたと仮定すれば、9世紀中葉頃を上限に捉えることも可能である。また、建物群の中の位置・木枠の方向などからみて、前述したSB24Bに伴うものと推定される。

## (II 区)

### a. 区画溝

SD201 本溝は昨年の調査で確認されたもので、調査区の西端でカーブを描きはじめていたために、南に折れて後述するSB23を囲うものと推定されていた。しかし、今年度の

調査の結果では、あまり屈曲せずに西側の丘陵裾に取りつくことが明らかになった。溝内からは、8世紀前半に限定される多量の土器、木簡、木製の草履・鎌の柄・斎串などが出土している。

### b. 据立柱建物

SB23 本建物は昨年度の調査で部分的に確認されていたもので、今回は南側桁行の柱穴2

個が新たにみつかり、梁間が3間(5.4m)になることが明らかになった。これらの底面には、いずれも礎板が確認されている。

今回調査した地点は、山際(南)にゆくほど著しく削平(近世以降?)を受けており、柱穴底面に設置された礎板が露出するような状況であった。以南の柱穴予想地点をボーリングしたが反応はなく、前述した削平によって完全に破壊された可能性が高い。

## 3. 検出された遺物

本年度の調査で出土した遺物は、コンテナで約25箱(I区20箱・II区5箱)を数える。遺物の年代としては、I区が9世紀前半~10世紀前半、II区が8世紀前半の資料を中心としており、それ以外のものとしては、両区のI~II層から中・近世陶磁器が若干出土しているだけである。以下では、遺構内出土資料を中心に出土資料の概要を述べる。

## (I 区)

### a. 据立柱建物出土遺物

SB24A P-305から、口径15.6cm、器高7.1cm、底径9.8cmを測る、おおぶりで身の深い須恵器有台杯が出土している(11)。高台はやや華奢で軽い内端接地となる。昨年度調査

のSE201出土資料と近似した時期の所産とみられるが、その生産地は不明である。

SB24B P-300から1~2、P-301から3~6が出土している。

- 1~3は須恵器の杯蓋で、口径13.6~14.9cmを測る。いずれも天井部にはヘラケズリが施される。端部が比較的長く下方に折れるもの(1・3)と、玉縁状をなすもの(2)がある。

4は口径15.4cmを測る身の深い有台杯で、内外面ともにロクロ挽きによる凹凸が顕著となっている。

5~6は口径12.4~12.6cm、器高3.2~3.3cmを測る無台碗である。これらは特徴的な胎土から、いずれも佐渡小泊窯の製品とみられる。SE201出土の同種の資料と比較して、器壁がかなり薄いなど新しい要素を持つ。

**SB25** 本建物に直接伴うものではないが、底の柱穴を破壊するSX302の下層から、「×」の墨書きを持つ7～8の須恵器が出土している。これらの資料は、SB25の存続期間の下限を示唆するものであろう。

8の杯蓋は、つまみが偏平で環状紐に近い形態をとるなど、SE201出土資料よりは後出的な様相を呈する。口径15.0cm、器高2.6cmを測り、天井部外面に施されるヘラケズリは、1／2.5の範囲に及ぶ。

7は有台杯で、口径12.0cm、器高3.9cm、底径7.7cmを測る。高台は四角形で、ほぼ水平に接地する。

**SB19** やはり本建物に直接伴うものではないが、各柱穴によって完全に切られている浅い落ち込み（SX314）から、9～10の須恵器が出土している。

10は体部を欠く小型の長頸瓶である。口縁部は、上下端がつまみ出され幅広の面をもつ。

9は偏平なつまみを持つ杯蓋である。口径15.0cm、器高2.4cmを測り、端部が比較的長く下方に折れるものである。天井部のヘラケズリは、外面の約1／2に施される。本杯蓋は、SE201出土資料と近似した時期に位置づけられ、SB21の上限を窺わせる資料である。

#### b. 井戸出土遺物

**SE202** 井戸廃棄時に入れられた、完形土器・獸骨がある。これらは前述したように、埋井の祭祀に関連する可能性が高い。

出土土器で器形が窺えるものは、土師器椀・鉢・須恵器甕がある。埋没環境が土器の保存に適していたためか、非常に残りが良い。椀の内面や底部外面には、磨耗がほとんど認められないことから、未使用状態で投入された可能性もある。

土師器椀は、端部が外反する端反り気味となるもの（31～33・36～37）と、逆「ハ」の字形に直線的に立ち上がるものの（34～35）、丸みを帯びて立ち上がるものの（38～40）の大きく3種類がある。法量では、口径12.3～13.5cm、器高3.6～4.2cm程度のものが主体を占めるが、おおぶりで身の深い32・37や、対照的に大型で浅い31も存在する。これらの特徴を門新遺跡での編年（和島村教育委員会1996・同1997）にあてはめると、延長6（928）年の漆紙文書が共伴したSD152段階よりは先行し、平成7年度の外割田地区や、平成5年度の門新遺跡旧河道出土資料（10世紀前葉）に近い。

41は小型の須恵器長頸瓶の口縁部破片である。端部は下端がつまみ出され、明確な稜をなしている。外面は平坦だが、内面はロクロ成形による凹凸が顕著である。

42は高い高台を持つ土師器の鉢である。本資料は、口縁および高台端部が意図的に打ち欠かれたのち二次的な焼成を受け、内外面にスス・タールが著しく付着している。

43は口縁が直立気味に短く立ち上がる小型の甕である。最大径は体部上半にくるが、胴の張りはあまり顕著でない。体部の調整は、外面が格子目叩き、内面の中位以上が同心円叩き、内面下

位が平行叩きである。内面の叩きが変化する位置には、分割成形されたことを示す接合痕が明瞭に残る。本例も前述した42と同様に、二次焼成による器壁の剥落やススの付着が顕著に観察される。

44は木製の曲げ物の底板である。残存部の最大径は約18.5cmを測るが、平面形は正円ではなく若干ゆがんでいる。表裏の調整は良好であり、側面には側板をとめた際の木釘による穴が、8ヵ所にわたって確認できる。

図版11は、-120~130cmのレベルで集中的に検出された獸骨である。腐蝕が進行し保存状態はあまりよくない。出土時点での骨の色調は茶褐色を呈していたが、付着するビビアナイト(藍鉄鉱)の影響で、時間の経過とともに青緑色に変化した。資料の多くは碎片化しており、比較的原形をとどめている5点について、小林園子氏(国立歴史民俗博物館西本研究室)・樋泉岳二氏(早稲田大学)から、下記のとおり鑑定していただいた。

動物種名	部位名	備考
a. ウマ	指基節骨	
b.〃	大脛骨 左中間部	
c.〃	脛骨 右中間部	
d.〃	寛骨 右の一部	
e.不明	大腿骨 左中間部?	シカあるいはヒトか? 保存劣悪のため不明

表1 SE202出土動物骨一覧

**SE203** 井戸内部からは、斎串・土器・刀子が出土した。これらのうち、埋土に混入していると考えられる土器細片以外は、埋井の祭祀に関連する可能性が高い。出土須恵器はいざれも、特徴的な胎土から佐渡小泊窯の製品とみられる。

12~20は須恵器の無台杯である。口径12.8cm前後、器高3.0cm前後の浅いものが主体であるが、18のように身の深いもの(4.5cm)も存在する。いざれも器壁は薄く、ロクロ成形による凹凸が顕著である。16~18・20の4点には墨書がみられ、16~17の側面には逆位の「日」が、18・20の側面には意味不明の記号状のものが複数描かれている。

21~23は須恵器の杯蓋である。21~22は低い環状をなすつまみ部分の断片で、内面には転用硯として使用された際の磨耗・墨痕を残す。23は口縁部の小片である。端部の受けは退化し、痕跡をとどめるにすぎない。

24はおおぶりで身の深い有台杯である。器壁はきわめて薄く、内面を中心にロクロ成形による

凹凸が観察される。

25~27は土師器の無台椀で、25~26の2点は内面が黒色処理されている。器面調整は、内外面ともに丁寧なヘラミガキであり、底部の糸切り痕は再調整によって完全に消されている。

28は内面が黒色処理された土師器有台椀である。高台部分のみの小片であるが、底径の復元値(10.8cm)からみてかなりの大型品と推定される。器面調整は、内外面ともに丁寧なヘラミガキである。

29は井戸底面から出土した木製の簾串である。頭部は圭頭で下端を尖らせており、両側辺の上部には、各2ヵ所に切り込みが加えられている。計測値は、長さ18.1cm、幅(最大)2.1cm、厚さ0.4cmである。

30は鉄製の刀子で、2片に折れた状態で出土した。刃先および基部下端、刃縁の一部を欠損するが、遺存状況は良好である。残存長16.6cm、幅(最大)1.1cm、厚さ0.3cmを測る。

SE202出土遺物の年代観としては、土器の形態的特徴からSE201より新しく、食膳具に占める土器の割合がかなり低率であることから、門新編年のI期に先行するものと推定され、おおむね9世紀後葉頃に位置づけられよう。

## (II 区)

### a. SD201・202出土遺物

SD201・202は奈良時代前半の掘立柱建物に伴う区画溝である。昨年度の調査では、溝の覆土下層から多量の土器・木簡・木製品が出土している。今年度の調査区は、前述したように後世の削平を著しく受けしており、SD201の基底部がわずかに残存している状況であった。このため、出土遺物も当初の予想に反して少なく、木簡4点と草履・鎌の柄などの木製品が少量検出されただけであった。

以下では、既刊の報告書(和島村教育委員会1998)に掲載できなかった資料を含めた木製品、および木簡(平成9年度出土分を除く)について概要を述べる。主な木簡・木製品の出土位置は第4図にドットで示したとおりで、溝内にまんべんなく分布するのではなく、2つの集中域の存在が読み取れる。

#### ①木製品

**漆器椀** 45は口径19.4cm、器高6.0cm、底径12.8cmを測る大型の椀である。体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がり、端部はかすかに端反りとなる。底部は少し上げ底気味であるが、明確な高台は持たない。疊付きの部分を除いた全面に、黒褐色を呈する漆が塗布されている。漆膜は薄く、表面において木地の木目・製作時の工具痕が観察可能である。

**挽物皿** 46~47はロクロ挽きで作られた木皿である。46の計測値は、口径18.6cm、器高2.0cm、底径14.8cmを測る。口縁部は丸みをもって立ち上がり、端部は断ち切られたように

平坦な面を持つ。底部外面および見込みには、製作時の工具痕をかすかに残している。47は口縁部を欠損するため全容が不明だが、底径15.0cmで46に近いことから、ほぼ同じ法量のものと推定される。底部は完全に平坦ではなく、中心から約6.0cmの位置にかすかに段をもつ。底部外面および見込みに残された製作時の工具痕は、46よりも明瞭である。

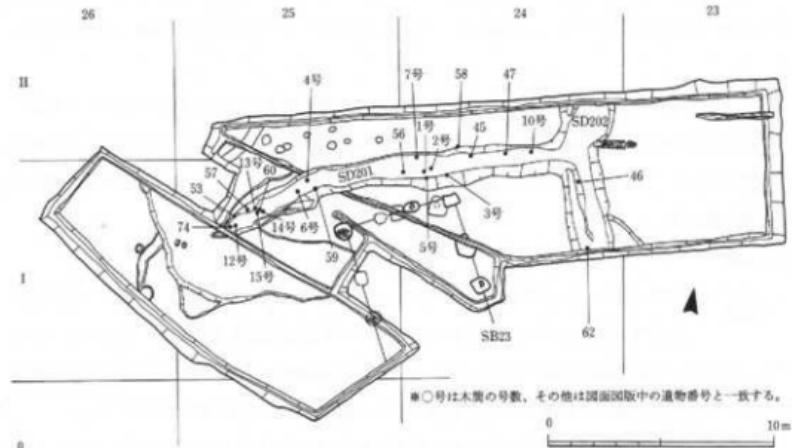
**曲げ物** 48~52は曲げ物の底板である。48は直径19.0cmを測るもので、中央に長径2.4cmの梢円形の穴が穿たれていることから、瓢として使用されたものと推定される。49・51~52は、直径17.3~17.4cmを測るほぼ同じ径のものである。50は片面のみ黒漆が塗布されたもので、やはり円形容器になるものと推定されるが、底板の小断片であるために詳細は不明である。

**草履** 53は長さ26.0cm、幅（最大）12.2cmを測る草履である。平面形は小判形を呈し、裏面の前寄りに1ヶ所、現存高0.4cmの低い歯が彫りだされている。全体的にかなり使い込まれており、足形が浅いくぼみとなつて明瞭に確認できる。鼻緒の穴は3ヶ所で、前部のそれは右に偏っており、右足用のものと考えられる。後部の穴のやや前の位置には、それぞれ木の楔状のもので塞がれた同様の穴があり、サイズの変更に伴う穴の位置の付け替えが実施されたことを物語っている。

**木簡状** 54~57は木簡と同じ形状をもつ木製品で、墨の痕跡を確認できないものである。

**木製品** 54~55は材の一端の左右にキリカキが施されるもので、他端の状況は欠損のため不明であるが、付け札と同じ形状をとるものと推定される。

56~57は長方形の材の一端を羽子板の柄状に作る封緘木簡であり、いずれも頭部を欠損する。56は「和島村1998」において8号木簡としたもので、体部下端の左右が穿孔されている。表面の



第4図 II区SD201・202主要木製品出土位置

調整は片面のみで、対面は分割時の剖面のままである。57は表裏ともに丁寧な調整が施され、平坦に仕上げられている。本資料は、厚みを持ち両面調整であること、体部の断面形が凸レンズ状をなすことなどから、2枚に分割される前の未成品である可能性が高い。

**斎 串** 58~60はいわゆる斎串である。58は頭部を圭頭とし下端をとがらせたもので、長さ

25.7cm、幅(最大)2.7cmを測る。側縁の切り込みは、左右それぞれ3回にわたって実施されている。切り込み位置よりやや下方に存在する穴は、植物の根の侵攻によって形成されたもので、人为的なものではない。59は一端を圭頭とし、他端を片側縁のみの切り欠きによって尖らせている。長さ31.7cm、幅(最大)2.8cmを測る。ケズリバナ状の側縁の切り込みはみられない。表面の調整は片面のみで、他方は剖面のままである。60は頭部を欠損するもので、剣先状を呈する下端の形状から、斎串あるいは付け札の断片である可能性が高い。

**馬 形** 62は薄板を削り、鞍を装着した馬の側面全身像を表現した木製の形代である。長さ

23.2cm、幅(最大)3.4cmを測り、馬身や鞍の表現はかなりディフォルメされている。腹面の中央付近には、柄を装着したとみられる長さ1.5cmの切り込みがあり、棒にさして地面に立てられた可能性が高い。

**鎌の柄** 74は長さ26.6cm、握り部分の直径1.6cmを測る鎌の柄である。鉄製の刃先をはめ込む

ための穴は、前部で4.5cm×0.9cm、後部で3.3cm×0.5cmを数え、前部がひとまわり大きくなっている。

**不 明** 61・63~73は用途不明の木製品である。

**木製品** 61は曲げ物あるいは、折敷の底板とも考えられるが、下辺に側板をおさえるための段に似た加工が施されるのに対し、対辺にはそれが見られず、右頭部に「L」字形の切り込みが施されているなど疑問点が多い。長さ48.8cm、幅(最大)9.2cmを測り、右側縁に添う形で3ヵ所の穿孔を見る。

63~64は長方形の材を素材としており、右側縁を中心に鋸歯状の切り込みが施されるものである。63は長さ28.0cm、幅2.0cmを測り、切り込みは主に正面から加えられるが、裏面からのものもいくつか確認できる。

65は矢板状を呈するもので、正裏面は割り面のままである。一端が剣先状を呈することから、木簡あるいは斎串の未成品であった可能性もある。

66~68は正裏面ともに平坦に削られた板材で、いずれも一端を欠損する。66は2ヵ所に穿孔が見られ、一端が刀の切っ先形に加工されている。67~68は一端を弧状に成形したものである。

69は長さ11.5cm、長径1.7cmを測る円筒形の木製品で、両端は切断の後に丁寧に面取りがなされている。

70~72は棒状の木製品である。いずれも一端を尖らせており、他端は欠損のため状況は不明である。太さ(直径)は0.6~1.8cmでばらつきがある。最も細い70は、箸状木製品と呼称されるも

のに類似する。72は端部に焼け焦げの痕が認められ、火鉢臼とセットをなす火鉢棒として使用された可能性がある。

73は断面が小判形を呈するもので、現存長32.9cm、幅3.0cm、厚さ2.1cmを測る。農具あるいは工具の柄と思われるが、一端を欠損しているために詳細は不明である。

## ②木簡

平成10年度の調査では、SD201から4点(封緘木簡の未成品を除く)の木簡が出土した。そのうちの2点は、いわゆるケズリクズである。木簡の釈読作業は、国立歴史民俗博物館の平川南教授にお願いし、以下の釈文を作成していただいた(表2)。

第12号は方頭をなし、下部は欠損している。丸部と書かれた面が、植物の根で多少荒れている以外、保存状態は良好である。全体に墨痕は薄く、赤外線ビデオカメラを使用しても、解読できた文字は少ない。

第13・15号はケズリクズで、前者は物品名(仕流あるいは仕疏)+数量(石・斗を単位とする)が記載された帳簿様の木簡の一部とみられる。

第15号は保存状態が劣悪な小断片で、わずかに文字数を確認できたにすぎない。

### 【第12号】

〔使か〕	〔廿か〕	
・「□□□□□□□西三村田人□		
〔人か〕		
・「□□□□□□□丸部□□□二□	(260) × 26 × 4	019型式

### 【第13号】

〔流か疏か〕		
□□仕□二石四斗	(79) × (11) × -	091型式

### 【第14号】

□□□□		
-		

(105) × (25) × 3 091型式

### 【第15号】

□		
-		

(27) × (16) × - 091型式

表2 木簡釈文一覧

### 第III章 まとめ

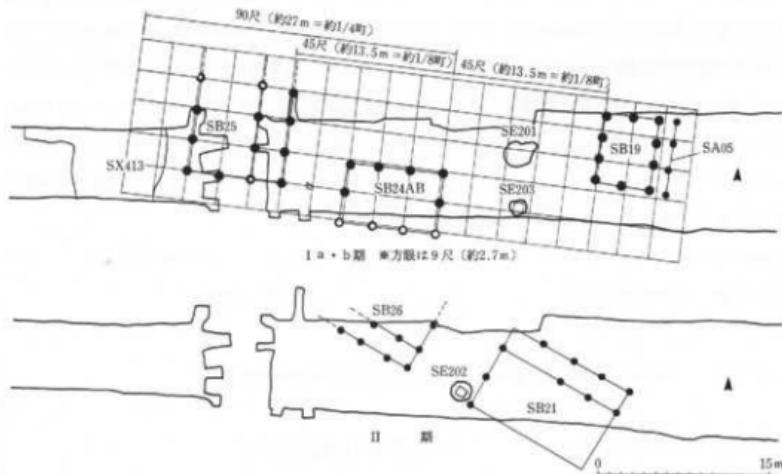
#### 1. 建物配置の計画性

以下では、I区において平成9~10年度調査で検出された掘立柱建物のうち、SB19・24AB・25（和島村1998、主軸方向分類D群）および、SB21・26（同、F群）の配置の計画性について述べる。

##### 【SB19・24AB・25】

第5図のように、本建物群に同方向の9尺（約2.7m）方眼を重ね合わせると、次のような関係が見てとれる。

- SB19西辺とSB25東辺の距離は、90尺（約27m=約1／4町）を測る。
- SB24AB東辺とSB25東辺の距離は、45尺（約13.5m=約1／8町）を測る。
- SB24AB東辺とSB19の西辺の距離は、45尺（約13.5m=約1／8町）を測る。
- 本建物群に伴う可能性が高いSE201・203は、SB24ABの東辺とSB19の西辺のほぼ中間（22.5尺）に位置している。
- 本建物群の西側に所在する主軸が同方向の浅い落ち込み（SX413）から、SB24ABの東辺までは、約90尺（約27m=約1／4町）を測る。SX413以西では掘立柱建物が分布しなくなる



第5図 I a ~ II 期造構配置模式図

など、明らかに遺構数が減少する。

以上のことから、これらの建物群は9尺を単位とする完数尺が用いられ、極めて高い計画性のもとに造営されていることが明らかになった。

#### 【SB21・26】

大半が法線外に延びているために、詳細を明らかにできない部分もあるが、SB21と26は20尺(約6m)の間隔で直列し、南辺の柱筋はほぼ一直線上に並ぶ。木枠の方向が建物の主軸に合うSE202も、本群に伴うものとみられる。

## 2. 建物群の性格

前項で述べた2群の建物は、敷地内の一隅に井戸を伴う点で共通しており、出土遺物や相互の切り合い関係などから、表3のような変遷が想定される。

これらのうち、柱間9尺の東西棟や庇を持つ大型の南北棟などで構成され、その配置に極めて高い計画性が読み取れるI a～I b期の建物群は、いかなる機能を担っていたのであろうか。

構成する建物の規模・構造・配置などからみて、官衙内部でも重要なエリアだったことは確実である。その性格づけには、井戸を伴っている点が大きな鍵を握っているものと思われる。内部に井戸を持つ施設としては、郡衙内部で食事を司る「厨」や、国司等の宿泊に供する「館」などが考えられるが、建物規模からみて後者の可能性が高い。いずれにしても、大型の南北棟と東西棟が棟筋を揃え、完数尺を用いて計画的に配置される施設(律令期)としては、県内初といえる。

II期については、下ノ西遺跡が機能した最終段階とみられ、I b期までとは主軸方向が大きく変化するなど、間に大きな画期が存在するようである。この段階の建物の方位に近いものとしては、平成8年度調査で確認された総柱建物(SB20)があり、その北側に隣接する土器廃棄土坑(SK01)も、主軸の一致から同時期の遺構である可能性が高い。SK01から約1,000個体出土した土器師範の型式は、SE202(II期)のそれと非常に近似しており、あまり時間差がないことを示している。下ノ西遺跡は当該期を最後に終焉を迎えて、入れ替わりで北東3kmの位置に、新たな地域支配の拠点とみられる門新遺跡(谷地地区)が出現する。

I a 期	SB24A・SB25	+ SE201 (9世紀前半～中葉)
↓		
I b 期	SB24B・SB25?・SB19	+ SE203 (9世紀中葉～後半)
↓		
II 期	SB21・SB26	+ SE202 (10世紀前半)

表3 建物群の変遷

## 第IV章 調査成果要約

### (遺構について)

1. 平成8年度の調査区から西に延びる、I区建物群の西限が明らかになった。
2. その西限付近で確認された一群は、大型の南北棟・東西棟・井戸などで、Ia～b期の段階には、9尺(約2.7m)の完数尺が用いられ、極めて計画的に配置されていることが明らかになった。
3. 2の施設は9世紀前半～後半にかけて機能したものである。
4. 施設の性格としては、井戸を伴うことや建物の構造・規模からみて、「館」など郡衙内部でも重要なエリアであったと推定される。
5. II期になると、建物の主軸がそれまでの正方位に近いものから、大きく東に振れたものに変わることが明らかになった。それに合わせて、井戸の木枠も主軸方向を変える。
6. II期建物群の年代は、同時期のSE202出土遺物などからみて、10世紀前半頃に位置づけられる。
7. II区では、昨年確認されたSD201が屈曲せず直線的に丘陵に取りつくことや、掘立柱建物(SB23)の梁間が3間であることが明らかになった。

### (遺物について)

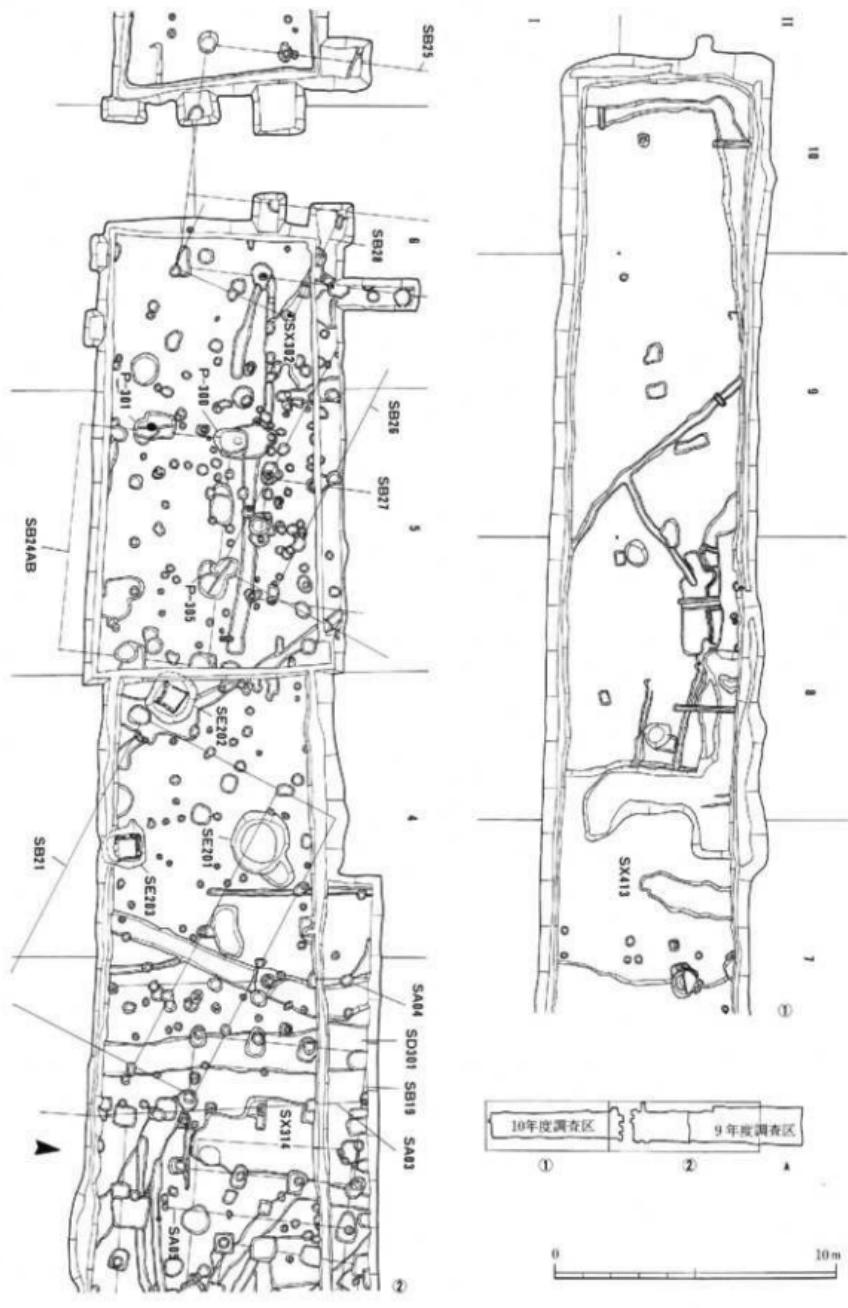
1. I区の井戸(SE202)から馬骨が検出され、埋井の際に水の神に捧げる生贋として入れられた可能性が高い。同様の例は新潟県内ではほとんどなく、上越市鉄砲町遺跡(藤巻正信ほか1995)に次いで、2例目となる。
2. II区のSD201から、ケズリクズ2点を含む4点の木筒が出土した。このほかに封緘木筒の未成品と思われるものも存在し、II区周辺で木筒の製作・再加工が行われていたことが明らかになった。

## 引用・参考文献

- 春日真実 1992 「越後・佐渡における須恵器生産終末期の様相」『北陸古代土器研究』第2号  
北陸古代土器研究会
- 金子裕之 1988 「律令期祭祀遺物集成」律令祭祀研究会
- 坂井秀弥ほか 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」  
新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡」新潟県教育委員会・  
建設省新潟工事事務所
- 坂井秀弥・鶴巻正昭・春日真実1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 田中 靖 1997 「下ノ西遺跡の調査成果」「第23回城柵官衙遺跡検討会資料」古代城柵官衙遺  
跡検討会
- 田中 靖 1998 「下ノ西遺跡 平成9年度の調査成果」「第24回城柵官衙遺跡検討会資料」古  
代城柵官衙遺跡検討会
- 田中 靖 1999 「下ノ西遺跡 平成10年度の調査成果」「第25回城柵官衙遺跡検討会資料」古  
代城柵官衙遺跡検討会
- 東日本埋蔵文化財研究会 1994 「古代官衙の終末をめぐる諸問題」
- 藤巻正信ほか 1995 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第65集 上越市春日・木田地区発掘調査報告  
書V 鉄砲町遺跡」新潟県教育委員会・(社)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山中敏史 1994 「古代地方官衙遺跡の研究」 塗書房
- 和島村 1996 「和島村史」資料編1 自然・原始古代・中世・民俗・文化財
- 和島村 1998 「和島村史」通史編
- 和島村 1998 「今、注目される越後の古代—和島村出土木簡の意義—」
- 和島村教育委員会 1992 「和島村埋蔵文化財調査報告書第1集 八幡林遺跡」
- 和島村教育委員会 1993 「和島村埋蔵文化財調査報告書第2集 八幡林遺跡」
- 和島村教育委員会 1994 「和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡」
- 和島村教育委員会 1995 「和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡」
- 和島村教育委員会 1996 「和島村埋蔵文化財調査報告書第5集 門新遺跡外割田地区」
- 和島村教育委員会 1998 「和島村埋蔵文化財調査報告書第7集 下ノ西遺跡一出土木簡を中心と  
して—」

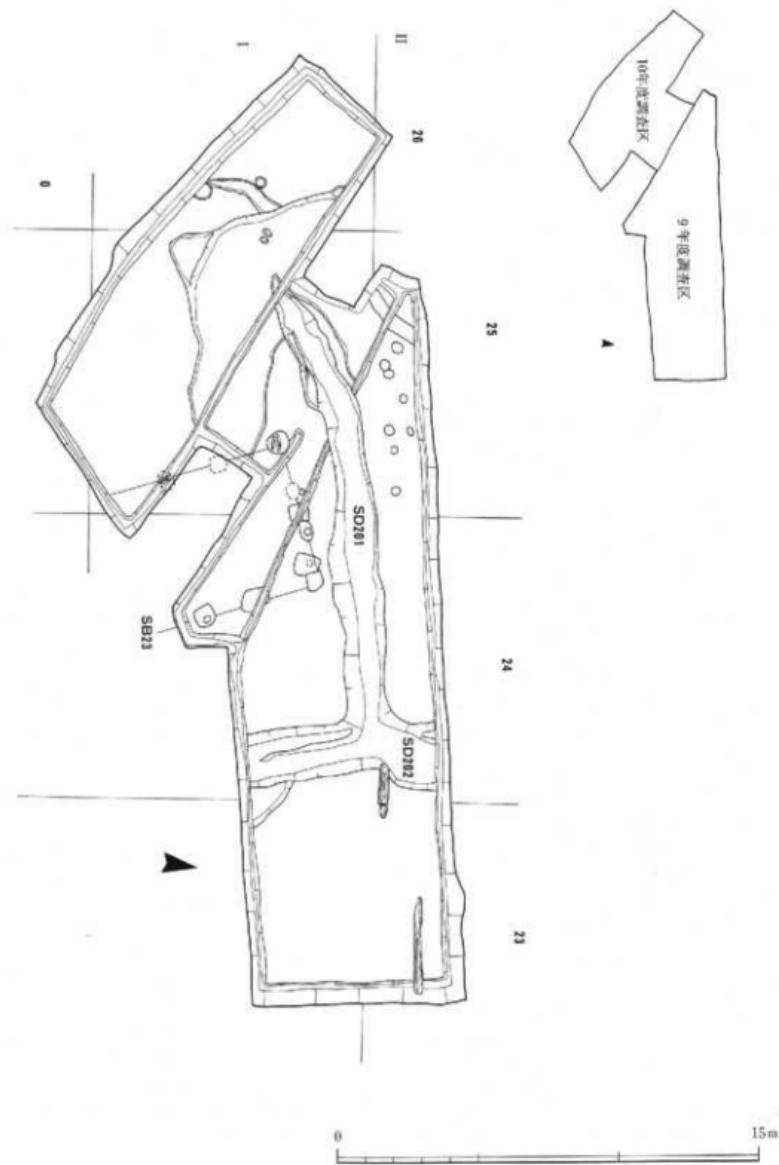
# 図 版

図面 1



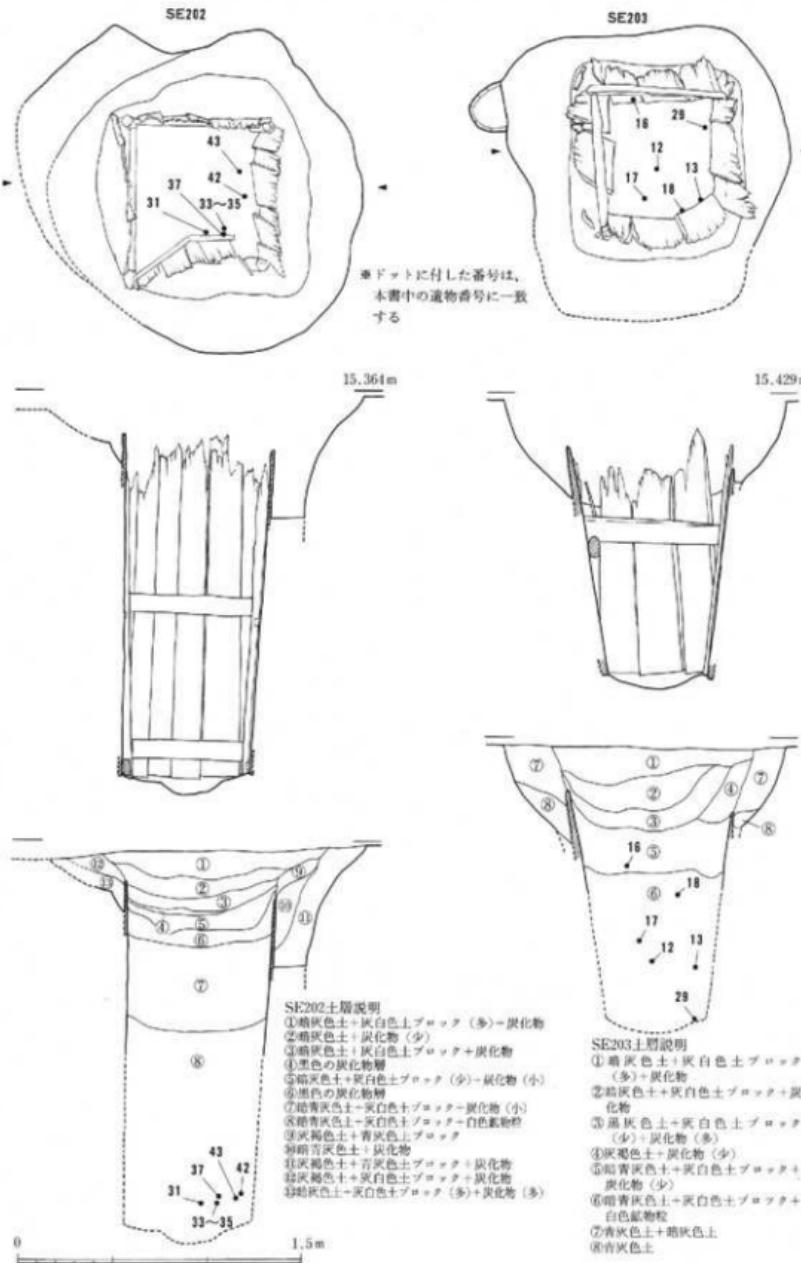
I 区 造構平面図

図面 2



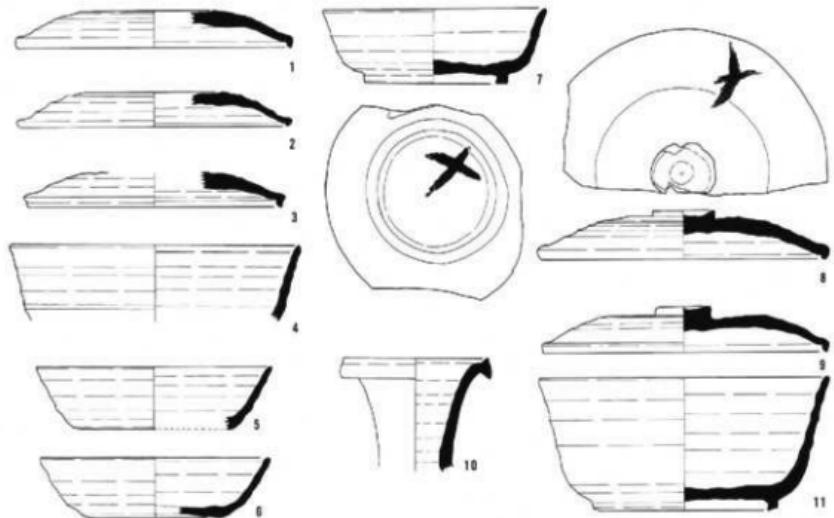
II区 造構平面図

図面3

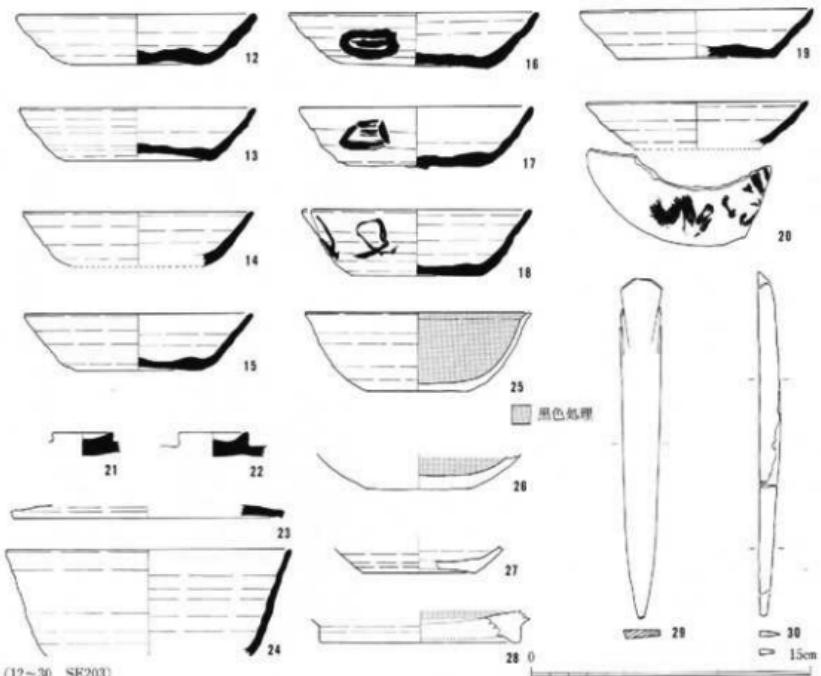


I区 SE202・203平・断面図

図面4

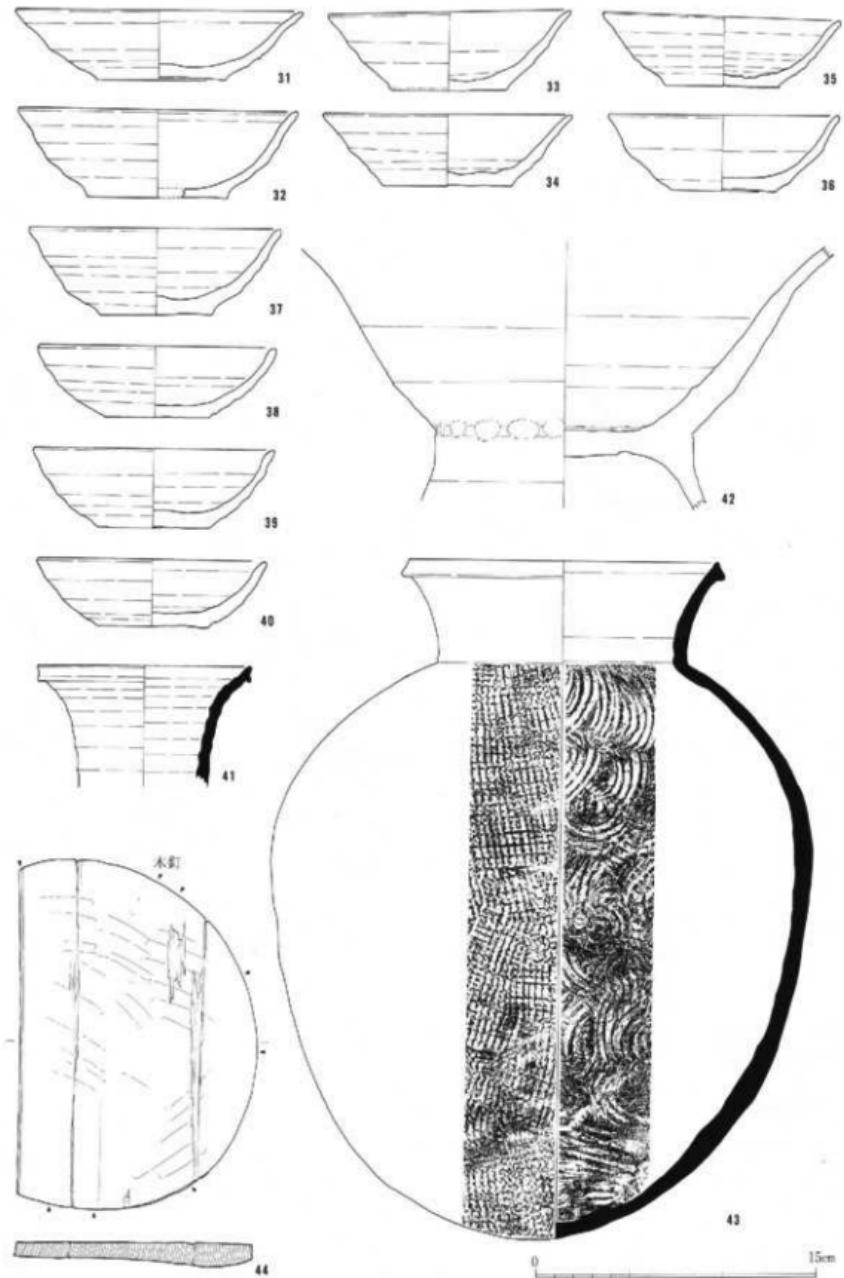


(1~2 SB24B P-300, 3~6 SB24B P-301, 7~8 SX302, 9~10 SX314, 11 SB24A P-305)



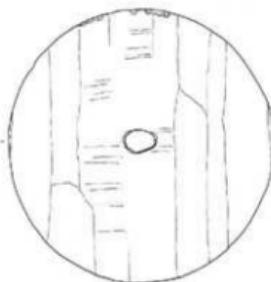
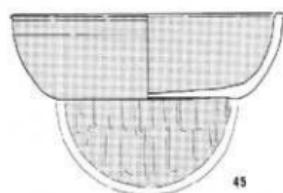
(12~30 SE203)

図面 5



I 区 出土遺物 (SE202)

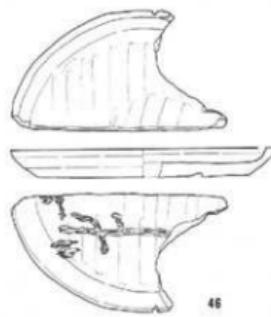
図面6



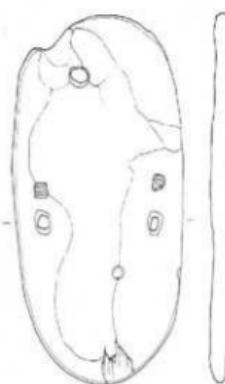
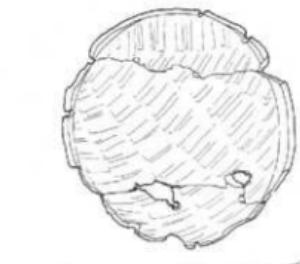
■ 黒塗



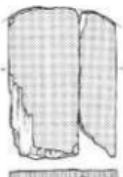
48



49



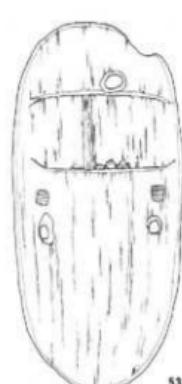
51



52



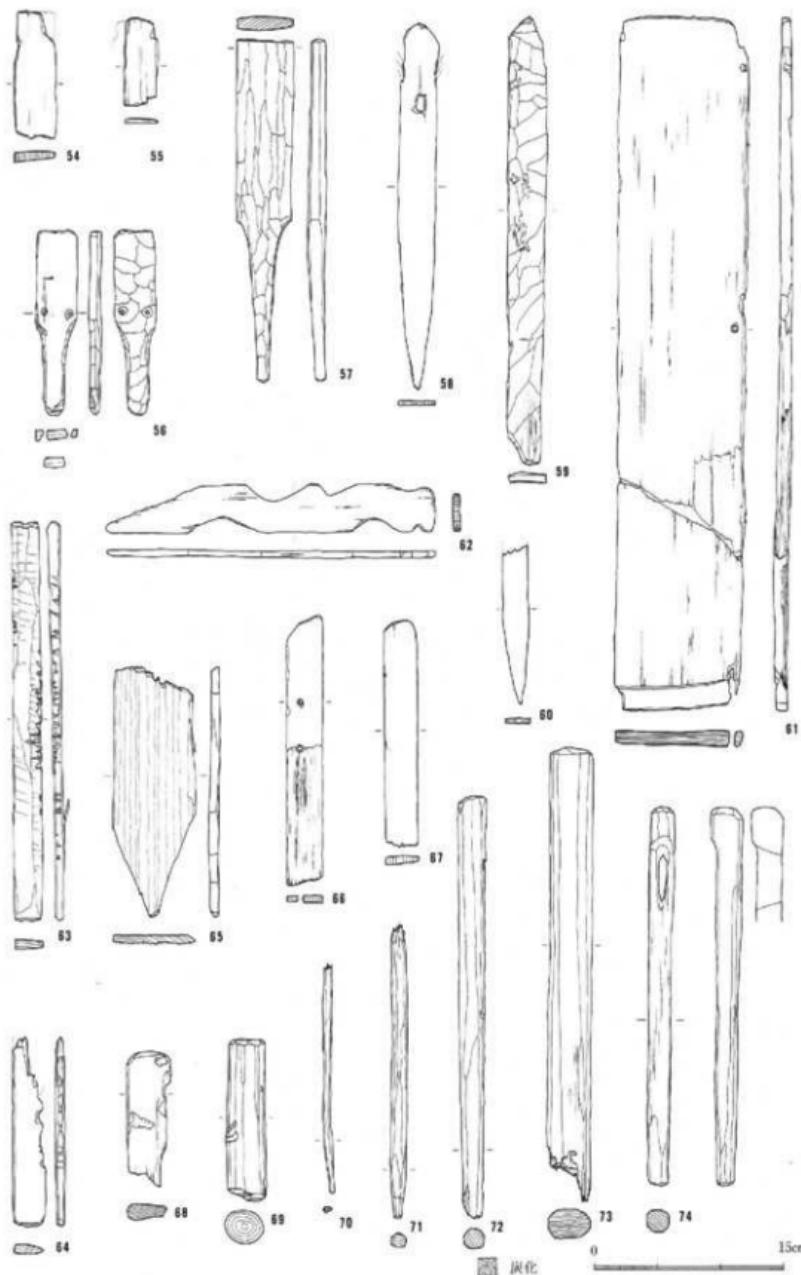
54



55

0 15cm

図面 7



II区 出土木製品(2) 62 SD202、その他 SD201

図版 1



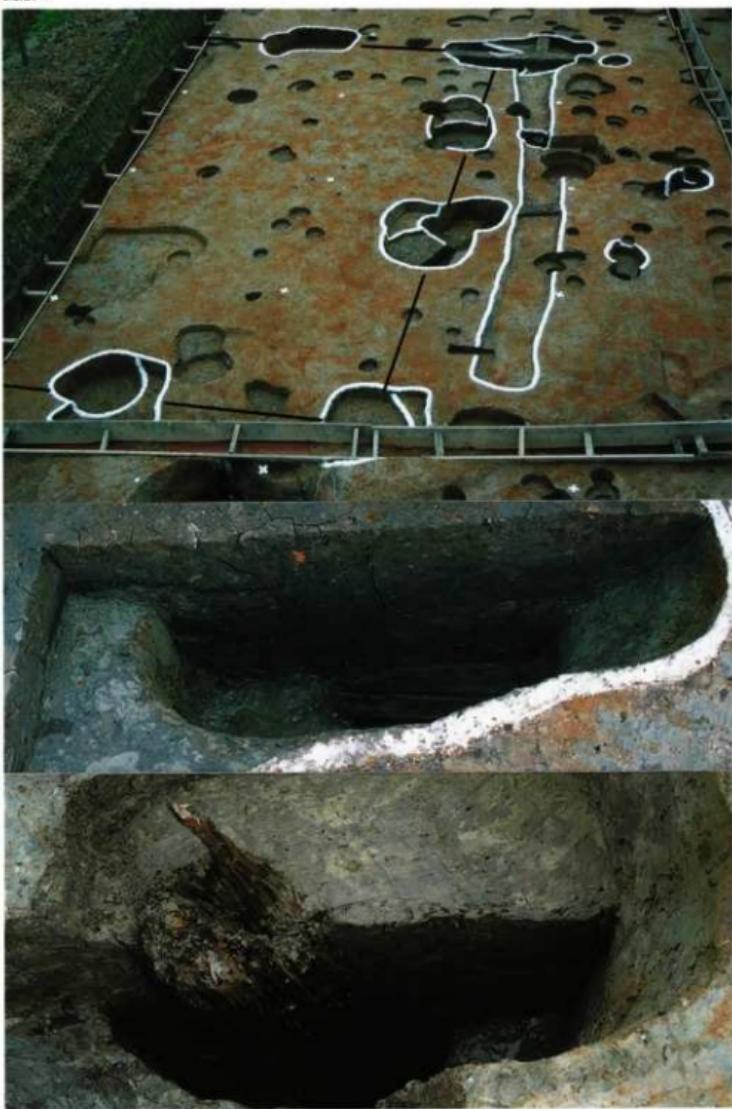
1区 空中写真(1)

図版 2



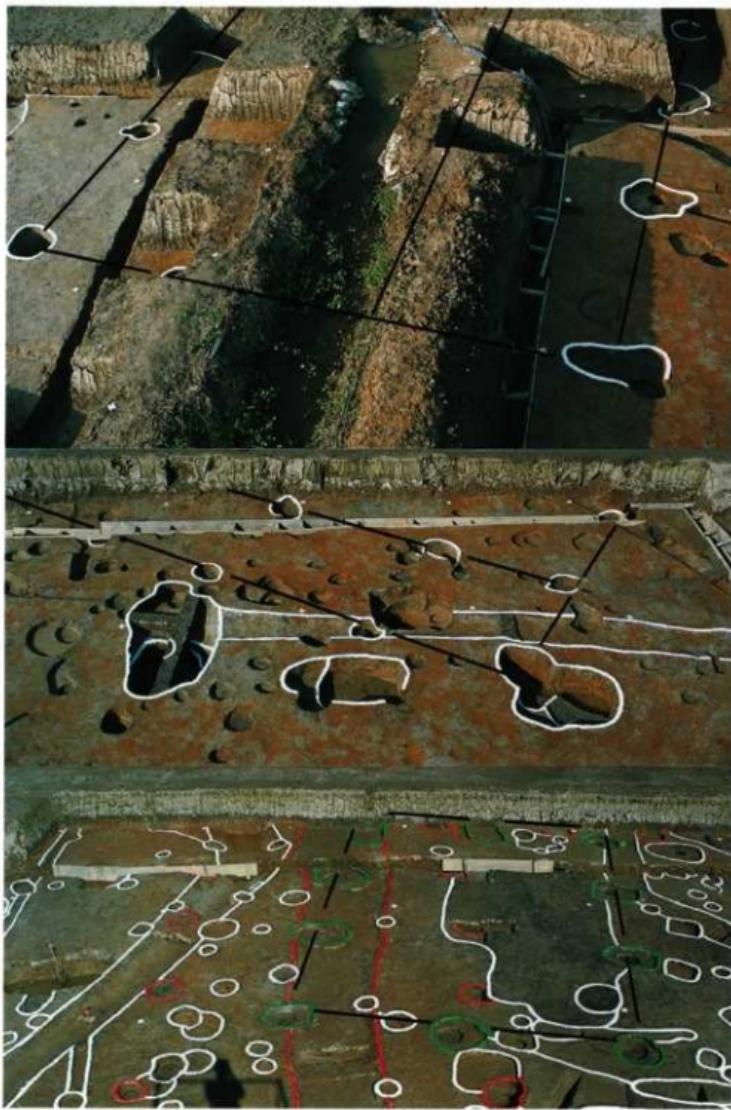
I 区 空中写真(2)

図版 3



▲ I 区SB24AB（東から） ▶ 同柱穴土層断面（P-300） ▷ 同（P-301）

図版 4



▲ I 区SB25 (南から)   ► SB28 (南から)   ▼ SB19 (南から)

図版 5



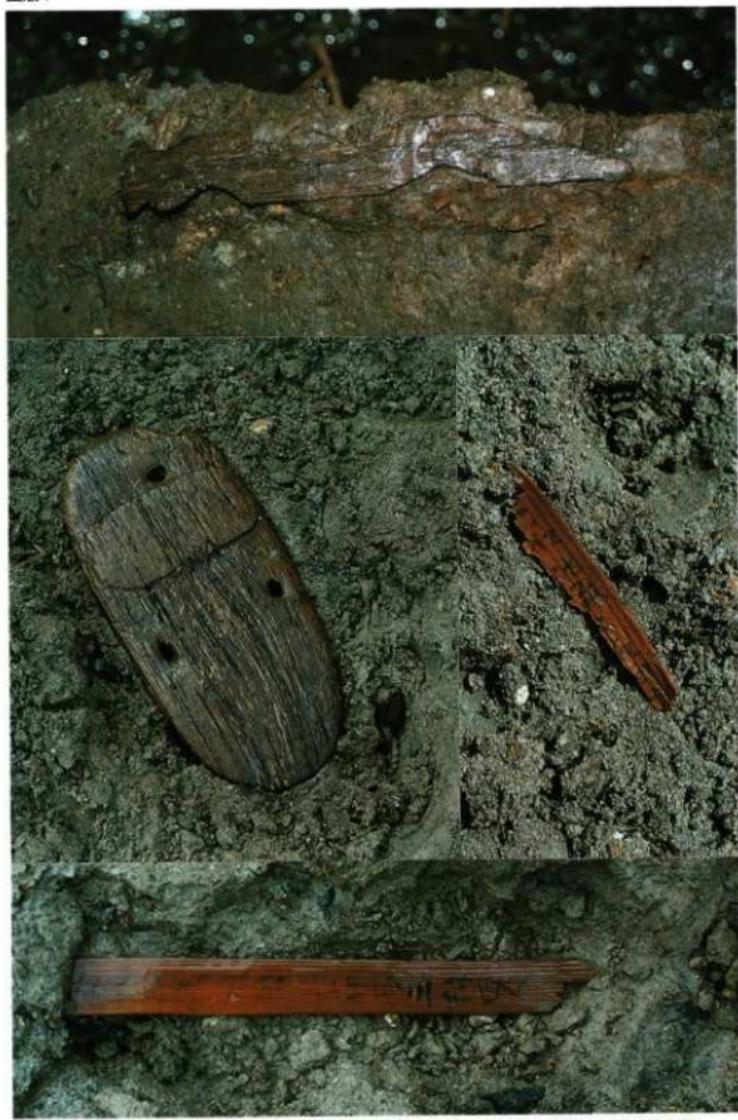
▲ I 区 SE202 (南西から) ▼SE203 (北から)

図版 6



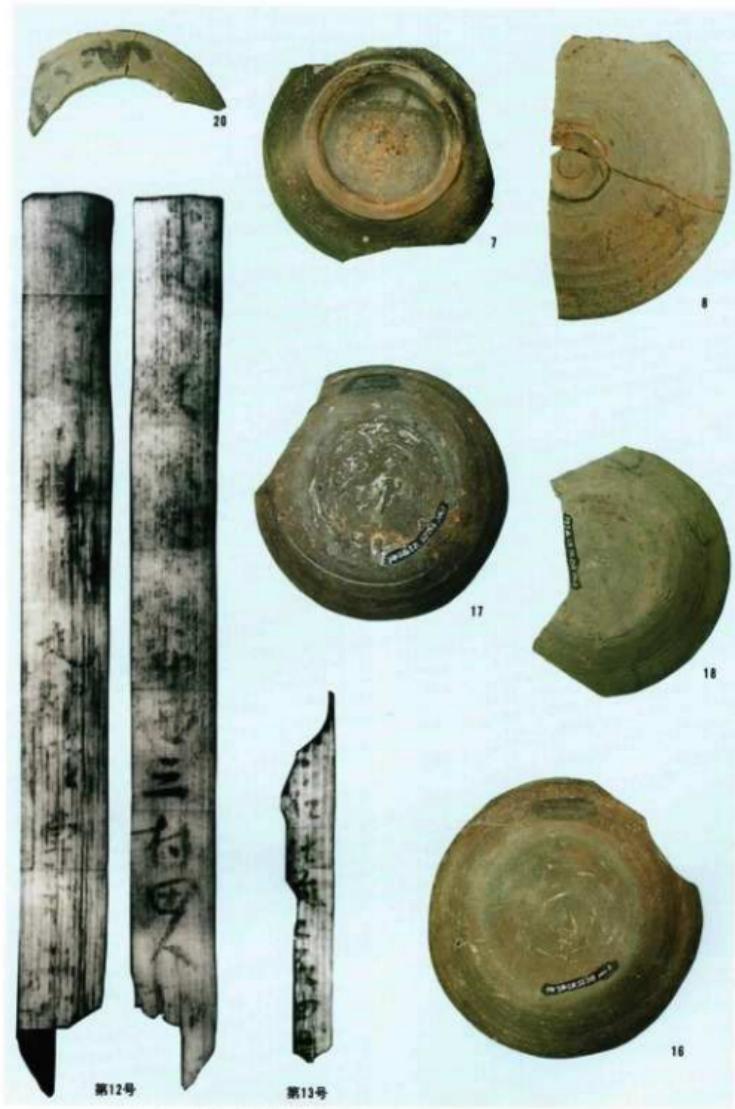
▲II区空中写真 ▶SB23模板A（北から）▼同模板B（北から）

图版 7



▲ II区 SD202馬形出土状况 ◀SD201草履出土状况 ►同13号木刷 ▼同12号木箒

図版 8

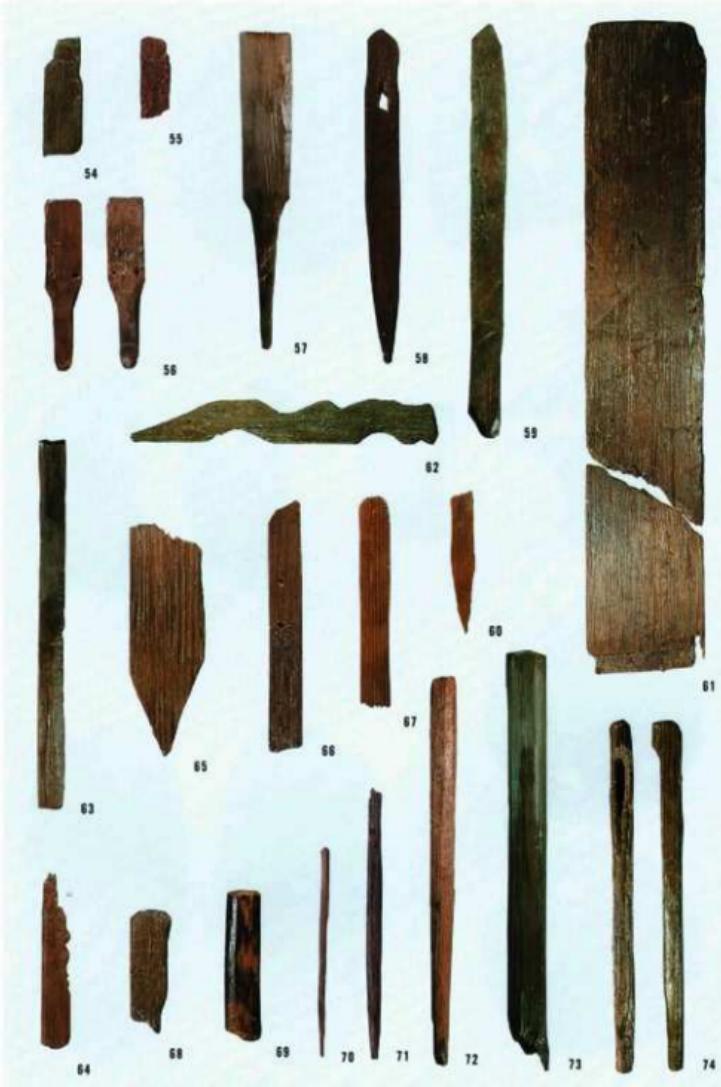


I ~ II 区 出土木筒・墨書土器 (墨書土器 S = 約1/3)



II区出土木製品(1) S = 約1/3

図版10



II区出土木製品(2) S = 約1/3



I区SE202出土馬骨 S=約1/3

## 報告書抄録

ふりがな	しものにしいせき							
書名	下ノ西遺跡 II							
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	田中 純							
編集機関	和島村教育委員会							
所在地	〒949-4511 新潟県三島郡和島村大字小島谷3434番地4 TEL 0258-74-3111							
発行年月日	1999年3月30日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°	m <sup>2</sup>		
下ノ西遺跡	新潟県三島郡和島村大字小島谷	154041	16	I区 37度 34分 15秒 II区 37度 34分 14秒	138度 46分 13秒 138度 48分 94秒	1998.8.3 1998.12.4	約400	村道建設に伴う確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
下ノ西遺跡	官衙跡	奈良時代 ～平安時代	掘立柱建物6棟 井戸2基 その他溝・土坑など多数	土器・須恵器・壺・草履・曲物・謙柄・封緘木筒未成品・木筒(ケズリクズ含む)・墨書き器・鉄滓・馬骨	<ul style="list-style-type: none"> <li>大型の南北棟・東西棟が9尺の完数尺で配置されており、井戸を多数伴うことから、「館」などが存在した可能性が高い( I 区)。</li> <li>II区では、封緘木筒未成品・木筒のケズリクズが検出され、木筒の製作・再加工が、盛んに行なわれていたことが明らかになった。</li> </ul>			

### 和島村埋蔵文化財調査報告書第8集

## 下ノ西遺跡 II

平成11年3月25日印刷  
平成11年3月30日発行

発行 新潟県和島村教育委員会  
印刷 梶 第一印刷所  
新潟市和合町2丁目4番18号  
電話 (025) 285-7161